

株式会社ダイシン（長野県）

～ feed the future - モノづくりの未来を送り出す ～

1. パーツフィーダのリーディングカンパニー

昭和54年の創業以来、株式会社ダイシンは、パーツハンドリングの自動化を最先端で進めてきた。四半世紀前、初めて蒔かれた独創技術の種は次々と新たな実を結び、エレクトロニクス&メカトロニクスを始めとする広範な分野で、製造ラインの自動化、生産のイノベーションに貢献し続けてきた。

現在、ダイシン・パーツフィーダ（部品供給）システムは、国内ばかりでなく、世界の市場で大きな評価を得ている。例えば、0.4mm×0.2mmといった次世代の超微細チップのフィーディングは、今、同社が最も得意とするところだ。

エレクトロニクス&メカトロニクス製品においては、加速度的に集積化が進んでおり、電子部品や半導体部品などの微細チップを整列搬送・供給するパーツフィーダの性能が、生産効率とコストパフォーマンスを得るために重要なキーポイントになっている。

同社はこれまで培ってきた超精密加工技術と高度な制御技術を基に、電子デバイス、通信機器、情報機器、AV機器など多彩な分野に役立つパーツハンドリングシステムを提供している。

2. 開発製造の現場から知財を発掘

創業は、大手情報関連機器メーカーで設備関係の仕事をしていた三村太郎現社長が昭和54年に独立し、(有)大伸工業を設立したことに始まる。時計・精密部品関係の技術が得意分野であったため、独立後も大手情報関連機器メーカー関係の仕事を行っていた。

従来、顧客から「良質の製品を安定供給して欲しい」という要望があれば、たとえ他社の特許権が関係していても、特許権を持っている会社にロイヤリティを払い、商品を作っていた。当初は自社製品が特許になるかどうか調べたことはなく、経営に知財が重要という意識自体を持っていなかった。

その後、他社にロイヤリティを払い続けるだけではなく、他社にない技術であれば特許を取得することにより、他社の市場への参入を制限でき、他社が自社の技術を使いたいということがあれば、ロイヤリティ収入も得ることができると考えて、平成11年頃から積極的に特許出願をするように方針転換した。

研究部門が専門的に研究開発を行うのではなく、製造・技術部門の社員各自が日々工夫しながら作っていき、その中で良いアイデアがあれば特許出願をしていくという方法を採用している。製造・技術関連部門の全員が発明に携わっており、出願するかどうかの最終判断は社長が行う。

特許権を取得している自社製品と全く同じ製品が他社のホームページに載っていたことがあり、警告状を送ったところ、その後はホームページからは消えた。しかし、その後に追跡調査はしていないため、本当に模倣品を作をやめたのかどうかはわからない。費用等のことを考え、訴訟にはしていないが、警告状での対応は2～3回ほど行った。中小企業にとって権利侵害対策は難しい。

Feed（フィード）という言葉には、部品などを生産ラインに「送る」「供給する」のほかに、「養う」「育てる」「生きる」などの意味がある。同社は、パーツフィーダシステムの技術を「養い」、人を「育て」、ノウハウを「生かし」、モノづくりの未来を切り拓いていく。

「パーツフィーディングの世界ナンバーワン企業へ」これからもこの目標に向けて、知財を活用しながら、エネルギーと情熱を注いでいく。

【保有権利に基づく製品例】



主力製品「パーツフィーダシステム」



パーツフィーダボウルの加工前（右）と加工後（左）



次世代型部品供給システム

<会社概要>

名称及び代表者名	株式会社ダイシン 代表取締役社長 三村 太郎
本社所在地	長野県塩尻市片丘今泉9828-15 今泉テクノヒルズ産業団地
創業	1979（昭和54）年
資本金	3,000万円
従業員数	65名
主要製品	パーツフィーダシステム、各種振動体、圧電式平行フィーダ
電話	0263-53-4411
URL	http://www.kdaishin.com